

平成30年度秋田県総合政策審議会
第1回農林水産部会 議事要旨

1. 日時 平成30年5月31日(木) 午後3時45分～午後5時

2. 場所 総合庁舎6階610会議室

3. 出席者

【農林水産部会委員】

今野 克久 (有限会社今野農園代表取締役)
佐々木 昭 (秋田県漁業士会会長)
佐藤 総栄 (有限会社秋田グリーンサービス代表取締役)
舘岡 美果子 (果夢園代表)

【県】

小野 正則 (農林水産部次長)
能見 智人 (農林水産部参事(兼)農地整備課長)
齋藤 正和 (農林水産部農林政策課長)
柴田 靖 (農林水産部農業経済課長)
河越 博之 (農林水産部農業経済課販売戦略室長)
阿部 喜孝 (農林水産部農山村振興課長)
本藤 昌泰 (農林水産部水田総合利用課長)
渡部 謙 (農林水産部園芸振興課長)
畠山 英男 (農林水産部畜産振興課長)
石井 公人 (農林水産部水産漁港課長)
石山 正喜 (農林水産部全国豊かな海づくり大会推進室長)
齋藤 俊明 (農林水産部林業木材産業課長)
櫻田 良弘 (農林水産部森林整備課長)
土門 久仁子 (観光文化スポーツ部秋田うまいもの販売課)

【事務局】

秋田県農林水産部農林政策課

4. 部会長あいさつ

◎今野部会長

第一回目ということなので、委員の皆様より、忌憚の無い御意見をいただけるようお願いしたい。

5. 議事要旨

◎今野部会長

それでは次第に沿って進めさせていただくが、その前に一言申し添えたい。審議内容は議事録としてホームページに掲載される。その際には、委員名は特に秘匿する必要が無いと思うので、公開としたい。

それでは議事（1）について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料1により説明～

◎今野部会長

ただいまの事務局の説明について、意見・質問はあるか。

～意見無し～

◎今野部会長

議事（1）は日程の確認なので先に進めたい。もし何か意見があれば、後で聞いてもらっても構わない。それでは、次に議事（2）、当部会で所掌する農林水産戦略の各施策に対する取組について、事務局から説明をお願いします。

□事務局（農林政策課）

～資料2、資料3により説明～

◎今野部会長

ただ今の事務局の説明について、意見、質問等があったら伺いたい。今回は時間が限られていることから、テーマをある程度絞りたいと思う。先程、事務局から担い手の確保・育成や労働力の確保、ICTなどの先端技術の活用について説明があったが、それらについて現場の視点から発言をお願いしたい。

では、はじめに館岡委員からお願いしたい。

◎館岡委員

来年度就農予定の研修生を受け入れているが、就農のための資金が無く、給付金を活用できればと思っている。研修者は、実家が農業をしていないことから「移住就農まるごと支援事業」に該当する可能性がある。そのような人は、県内に4名いるようだが、新規就農予定者として給付金を受けられる時期が市町村によって違う。見込みで給付金を受けられれば良いが、潟上市の場合は、就農後の4月以降でなければ新規就農予定者として認めていないようなので、来年度申請するときには、制度が無くなってしまわないかという不安があるとのことだった。このことから、新規就農する際には、資金が無い人のためにも、給付金制度があれば助かると思う。今後も制度は継続してほしいと思っている。

研修生の中には、経営者として一から学びたいため、研修先を試験場ではなく、農家を希望する人もいるが、どこの農家に希望すればよいかわからないということがあり、受入先と研修生がうまくマッチングしていない状況がある。特に果樹については、希望通りに果樹ができる人は数人しかいない。果樹をやりたいのに、研修先が見つからず、最終的にネギをやることになったという人もいると聞いた。果樹は野菜に比べて、収入を得られる時期が遅いかもしれないが、果樹をやりたいと志している人がいるなら、果樹をやれるような支援がほしい。

◎今野部会長

私も何人か受け入れているが、受入側のタイミングも重要だと感じている。

◎館岡委員

今受け入れている研修生は、10月の収穫時期からスタートしており、その収穫作業がとても魅力的だったようで、果樹をやりたいと言っている。丸一年近くいるが、夫の指導により、専門的なこともわかることが多くなった。

◎今野部会長

こちらでは研修生に単純作業をお願いすることが多く、もっと勉強したいことがあると言っていなくなった。機械の運転が多く、魅力を伝えきれなかったと思っている。

研修生の受け入れにあたっては、事前の準備や受入体制を整備することが必要で、可能であればマニュアル等がほしいと思っている。従業員がたくさんいるような農業法人であれば得意かもしれないが、家族経営では魅力を伝えるのが難しいかもしれない。

それでは次に、佐々木委員に発言をお願いしたい。

◎佐々木委員

漁業関係の話では、水産振興センターが新しくなるということで期待している。秋田県は他県と違って養殖が無いため、稚魚を放流してもらっているが、車エビなど、その地域に定着する種類を放流してもらおうと助かる。

秋田県では農業については、いろいろ対策がなされて発展してきているが、漁業は若い人が少なく、第1次ベビーブーム世代の60代後半～70代が多い状況にあるため、今後は船を手放して辞める人が多くなると思っている。

担い手の確保・育成については、自分で経営できれば、漁業は面白いと思っている。秋田県では高齢の乗組員がやめていく中で、若い人も入ってきてはいるが、部下として働くだけでは面白くない。自分で経営し、船を操縦して魚を獲るという「親方」や「船長」でない限り、漁業の魅力は感じづらいかも。ベビーブーム世代の辞めていく人に教えてもらい、船長になれば、就業者も面白いのではないか。労働力不足で部下として働くより、経営者として引き継いだ方が面白いと思うし、やりがいもあるのではないか。そういう意味では労働力の確保というより、引き継ぐことが大切だと思う。自分が経営者となって主体的に取り組めれば、面白いと思う。

例えば、レジャーで釣り人を沖に連れて、釣りをさせるものがあるが、一番面白いのは、釣れるところに連れて行く船長だと思っている。どこに行けば釣らせられるとか考えながら沖に連れて行くのは、釣り人の何倍も面白いと思う。そういったところが分かれば漁師の楽しみが分かるのではないか。

◎今野委員

辞めた人の船はどうなる？

◎佐々木委員

譲るか、50万円ほどで廃棄するかになる。エンジンの取り替え等で1,000～1,500万円前後の費用が必要なため、取り替えのタイミングで持ち主が高齢だと辞める場合も多い。

◎今野委員

船はいくらするのか。

◎佐々木委員

4.9t程度の船で、レーダー、魚群探知機等の装備を合わせて2,000～3,000万円と価格は高い。就業して魚が捕れる場合は良いが、魚が捕れないと借金ばかりが増える。

体の調子が悪いことを理由に漁業を辞める人もいるが、船としてはその後何年か使えるものもあるため、何か活用できると思う。

それから、ICTについては、全然わからない。専門的な知識を持った人でないと、秋田県の漁業では取り入れるのが難しいと思う。その日暮らして魚を捕っている漁師に対して、導入を進めるのは難しい。

◎今野委員

では佐藤委員に発言をお願いしたい。

◎佐藤委員

ICTについては、ちょうど今、ICT林業ということで、木材クラウドの開発を進めているところである。労働力の減少というよりは、合理化・効率化の一環として取り組んでいる。内容としては、供給側と需要側のマッチングの推進、資料等のデータベース化による管理などである。その他として、森林調査については、レーダーで三次元計測し、データ化して管理することも行っている。

労働力に関しては、弊社では不足しているというよりも、余っている状態である。ただし業界全体としてそういうわけではない。弊社が秋田市近郊にあって、若い人が多いというのが要因だと思われる。今でも応募は多数来ていて、断っている状況である。林業大学校からもインターンシップがあり、そのまま就職するというルートも確立されている。しかし、市内から外れた林業会社については、募集してもなかなか応募がないという状況である。

◎今野委員

林業を題材にした映画もあったが、実際は映画のイメージか。

◎佐藤委員

実際は映画よりも機械化が進んでいる。弊社でも機械化は進めている。

◎今野委員

秋田市外の業者で採用が少ないというのは、機械化と関係があるのか

◎佐藤委員

多少なりあると思われる。機械が少ないということは、人が頑張らなければいけない＝大変というイメージに結びつくかもしれない。外仕事で体力勝負でもあることから、弊社では機械化を進めており、社員よりも機械が多い。それが良いイメージになっているのかもしれない。

◎今野委員

農地バンクの山版のようなもので、不在地主の土地に入って、森林整備などをすると聞いたが。

◎佐藤委員

来年度以降の森林環境譲与税を活用したものと思われる。不在地主の森林についても、間伐等に取り組んでいくこととなるようだが、業界としては、今後の仕事に広がりが出てくるものと思われる。労働力もたくさん必要になってくると思う。

良いことばかりあるかのように思われるが、機械化を進めることによって、機械経費は年々上昇している。しかし、売っている木材の価格は変わらないので、利益が下がらないように対応していかなければいけないという課題はある。

◎今野委員

それでは最後に私から発言させていただく。

担い手不足の件だが、全国的にそういう話になっていると聞いている。上越の農家から聞いた話だが、福島では50ha規模の法人がすぐ設立されるが、ノウハウがないため、経営できないという状態になることがよくあるとのことである。そこで、上越の農業法人がそこに投資し、経営者として入っているとのことであり、山口県でも同様に投資して、経営者として取り組んでいるとのことだった。その話を聞き、今後、私自身も法人経営している中で、人を採用して育成することや、給与体系、評価基準の設定など、当たり前のような経営にしていかなければならないと感じた。魅力のある会社になっていくには、やりがいはもちろん、育てる技術というものも含めて、それらを身につけていくべきと感じた。だが、普段の作業が忙しい中で、なかなかそういう部分に着手できないという現状もある。

それから、今年に入ってから、田んぼを購入し、規模拡大して、機械も大きくしているところであるが、経営的にあまり変わらない状況にある。昨年から研修に来ている人に指導し、手伝ってもらってはいるが、ここ2週間は、朝早くから夕方まで作業しており、機械が大きくなっても作業効率が変わらないということで悩んでいる。これについては、より効率的に作業するにあたって、県立大の先生と経営分析しながら、詰めていきたいと考えている。

I C Tに関しては、今年大潟村に多くのGPS田植機が入った。Facebook等でもその動画は見られるが、快適そうだと感じている。運転中の作業が軽減されるなど、見ていて最終的に欲しくなった。まっすぐ走るだけでどうなんだろうかという気持ちもあったが、効率が良さそうだと感じた。

資料での説明があったアシストスーツなどの新しい技術については、最初はとっつきにくい感じもあったが、いざ使ってみると思ったより良さそうだと感じたので、食わず嫌いせず、積極的に取り入れていきたいと思った。その1つとして、今年は密苗を試している。8条の田植機に苗を8枚積み、100m程の田んぼを1往復する間、1度も苗積みしなかった。1反歩に15枚と多めに使ったが、密苗実施前は25枚使っていたので、半分近く減った。田植え作業では、苗の積卸しに要する作業時間が運転時間より長いと思うが、その積卸し時間が大幅に削減されたことにより、家族にも好評だった。作業時間の短い人では、密苗の田植えで1haあたり90分程度となっており、従来より短縮されている。今後もいろいろ試しながら、良いものを取り入れていきたいと思っている。

それでは、最後に県からコメントがあればお願いしたい。

□県 小野次長

それぞれの専門分野から現場にもとづいた忌憚の無い御意見ありがとうございました。

今回は主に担い手不足というところにフォーカスして話し合っていたが、いかにそれぞれの魅力を伝えていくことが重要かと感じた。

農業に関しては、まずは収穫の喜びを知ってもらうということ、漁業については、船長、いわゆる経営者としての喜びを知ってもらうこと。林業については、機械化を進めることよって、若者への働き方のイメージを良くすることなどがあつた。

県としては、いろんな制度を作っているが、結局は農林水産業の魅力をいかに多くの人に伝えるかが大切であるかということを確認したところである。

次回の部会では、今回出た意見を深掘りし、来年度に向けた提言を作り上げていきたい。引き続き忌憚の無い御意見をいただきたい。